

私がなぜ現在の科目を選んだか

「衛生学公衆衛生学」

信州大学医学部衛生学公衆衛生学講座
野見山 哲 生

卒後1年目の大学院講義の際、その道の世界的権威であるA先生に、まさに「なぜ現在の科目を選んだか」と問われ、「病者を診るより病者になる前に予防したいから」と答えた。即座に「君は本当に医者なのか?」と言われた。祖父、父共に社会医学に携わる医師、という環境にあったせいか、医師の仕事は診療をすることだけ、という先入観はなかったように思うが、そればかりではないように思う。

勉強が不得手の私は、2年浪人して医学部に入学した。5年生のポリクリで、治療を受け元気に退院していく患者さん、治療の甲斐なく亡くなっていく患者さんと、精一杯関わっているB先生の姿に惹かれ、臨床医になりたいと思った。「医者にQOLは要らない」と断言し、医師という職業選択をしたからには、常に病める者の為に自己の全てを捧げること、を求めたC

私がなぜ現在の科目を選んだか

「第2内科」

信州大学医学部内科学第2講座
米 田 傑

私は、どの科目を選ぶべきか、迷ったことは一度もありません。私にとって医師とはイコール内科医のことであり、医学部を目指し始めた高校生の頃から、この認識は一度も変わったことはありませんでした。聴診器を片手にさりりと難病を診断し、一人静かに黙考しつつ、ときに不器用な笑顔を見せる、そういうほとんど妄想にも似た勝手な内科医のイメージが、子供の頃から鮮明に心の中にありました。外科医を描いたドラマや小説に出会うたびに、なぜ格好いい内科医を主人公にしないのかと不思議に思ったりもしたものです。この妄想の出所は今でも不明ですが、子供の憧れというものは概ねそういうものかもしれません。

医師になるのであれば内科医に。このゆるぎない確信と共に医学部に入学したものの、しかしすぐに、内

先生の姿勢に胸打たれ、臨床医に憧れた。一方、直接感謝されずとも、現場で真摯に人に接し、地道に、そしてひたむきに疾病予防に向かうD先生の姿が輝いていて眩しかった。よれよれの白衣を着て、盆暮れ、昼夜なく寡黙に実験台に向かうE先生の姿が素敵で、研究者になりたいと思った。「感謝されない医師たれ」と土屋健三郎産業医科大学初代学長が仰ったが、多くの人が予防の成果に気付き、感謝しなくとも、エビデンスを得て布団の中で一人喜びを噛みしめる、そんな医師になりたいと思った。これらの出会いを経て、地域に根ざし、人々のニーズに応え、全世界に役立つ仕事がしたい、と熱い夢を持ってこの分野を選んだ。

18年が経過し、僅かでもしてきたことは、家族を含む多くの人達に支えられ、共に成してきたことだ。それに感謝し、更なる20年は、全ての子ども、大人が健やかで楽しく生きることができ環境を作ること、に力を注ぎたいと思っている。

今A先生と同じ質問をされたらどう答えるか。胸を張って「病者を診るより病者になる前に予防したいから」と答えたい。

(産業医大平4年卒)

科領域の中にも複数の分野があるということを知って戸惑いました。消化器、循環器、神経…。今では当たり前のことですが、当時の私はそんなことも知らなかったのです。思い出だけでも苦笑が漏れます。

医学部を卒業したのは、医局に所属せずに県内の一般病院へと飛び出して行きました。消化器内科を専門に選んだのは、患者さんの数が多く、疾患の頻度も種類も多いやりのある分野であるということはもちろんですが、素晴らしい指導医の先生方にお会いできたということが、最たる理由ではないかと思えます。

それから数年を経て、第2内科に入局しました。医局に対してはずいぶん敷居の高い印象を持っていましたが、6年目で入ってきた私のような人間も、特段身構える様子もなく受け入れてくれる不思議な空間であったことに驚くと共に、ここまで導いてくださった多くの先生方に感謝している次第です。

環境は時と共に変わりゆくものです。しかし子供の頃から目指してきた理想の内科医像は今も揺るぎません。その姿に少しでも近づけるよう、精進を積み重ねる日々が続いています。

(信大平15年卒)